

技術・家庭科（家庭分野）の主張

1 教科で育みたい人間像

5 技術・家庭科（家庭分野）では「生涯にわたってよりよい生活を営む人」を育みたいと考えている。

私たちにあって、食べる、着る、住む、買う、売るといった行動は習慣であり、生活を形成しているものであると言える。私たちは、習慣となっていることに対して、社会の変化や環境の変化に流されている部分があったり、意識せずに行うことがあったりする。しかし、一度立ち止まり、自分の生活を見つめ直すことで、新たな情報を取り入れて、自分の中にある知識、思いや考えを更新していくことができると考えている。このように、現在の自分と照らし合わせながら生活を選択していこうとする人は、常にそのときの最善を考えて生活を営んでいると言えるだろう。

10 生活は常に変わっていくものであり、自分の意思でよりよい生活を追求していくことに終わりはないと言える。変化の激しい社会の中で、必要だと考える情報や知識を見つけだし、自分の生活に合ったものを選択することにより、生活をする上で大切にしたいことが見えてくるだろう。生活に直結して考えられる教科として、生涯にわたってよりよい生活を営む人となっていくことを願っている。

2 教科で願う子どもの学び

技術・家庭科（家庭分野）で願う子どもの学びは、「生活に対する思いや考えを他者と練り合い、価値観を更新していくことで、自分の生活に合った意思決定を繰り返すこと」と考えている。

20 それぞれが、当たり前だと思って生活をしていることが、他者にとっては当たり前とは限らない。現状でそれほど不自由を感じることや課題だと思うことなく過ごしていることもある。また、社会にでると、生活環境に直結するような価値観について語り合う場面は、少なくなっていく。そのため、自分の当たり前を見つめ直すことは新たな気づきや疑問をもつことにつながるだろう。授業では、それらを共有することで自分の見えなかった部分に気づかされ、価値観が揺さぶられ、自分の生活につなげていく。このように、生活の環境や背景が異なる仲間と生活について見つめ直し、語り合うことを通して、社会では見えにくい生活の環境や背景の違いから生じる多様な価値観にふれることは、家庭科の授業でしかできない学びだろう。例えば、災害食の中で最高の備蓄プランを考えるときに、水を準備する量またはペットボトルの大きさ、家族の食の好みや重視した食料、アレルギーに配慮した食料、ペットの餌など、人によって備蓄しておきたいものやその重さに対するとらえ方が異なる。子どもたちは「これが絶対だ」と自分が思っていたものや考えに対して、相手の思いや考えを知ることによって、多様な価値観に気づくことができる。さらに、実践的・体験的な活動を行うことによって、自分の考えから問題点が見えてきたり、自分が大事にしたいことがはっきりしたりしてくると考えられる。このような過程を繰り返すことによって、思考が豊かになり、よりよい生活を営むことへとつながると考えている。

35 子どもたちの生活は、一人だけではなく多くの人やものがかかわり合って成り立っているため、つながりを意識して考えていくことができるような題材配列や授業づくりを大切にしたい。すると、「もっとこうしていきたい」「もう少しよりよくできるのではないか」「改善の必要がある」など、生活に対する思いや考えが芽生え、他者と練り合うことで、価値観を更新し、自分の生活に合った意思決定を繰り返していこう。

40 そのような子どもは「生涯にわたってよりよい生活を営む人」になっていくと考える。このようにして、私たちは、家庭科の授業だからこそ育むことのできる子どもの学びの実現をめざしていきたい。